

脛骨遠位骨端線損傷後に長母趾伸筋腱障害を生じた一例

○天野 大 (あまの ひろし) (MD)¹⁾, 北 圭介 (MD)¹⁾, 田中 美成 (MD)¹⁾, 串岡 純一 (MD)¹⁾,
内田 良平 (MD)²⁾, 塩崎 嘉樹 (MD)²⁾, 堀部 秀二 (MD)³⁾

¹⁾ 大阪労災病院 整形外科

²⁾ 正風病院 整形外科

³⁾ 大阪府立大学

【目的】

脛骨遠位骨端線損傷後に長母趾伸筋 (以下 EHL) 腱障害が生じた一例を経験したので報告する。

【症例】

14歳男児。サッカーの試合中に受傷，前医で脛骨遠位骨端線損傷 Salter&Harris 分類 type2 の診断で，徒手整復後ギブス固定された。良好な整復位が得られたが，直後から母趾中足趾節（以下 MP）関節は軽度伸展位で屈伸不能となった。受傷後2か月経過しても症状改善なく当科紹介。母趾周囲の知覚正常，EHL 腱のレリーフは MP 関節で浮き上がっていた。足関節中間位において，母趾 MP 関節可動域は他動的伸展 40 度から 60 度で，他動的屈曲および自動伸展屈曲運動は不可であった。母趾 MP 関節には足関節底背屈で動的腱固定効果がみられた。MRI では EHL 腱の走行を確認できたが，エコーによる動的評価では上伸筋支帯レベルで EHL 腱の滑走を確認できなかった。以上より EHL 腱障害による母趾伸展拘縮と診断し手術を施行した。上伸筋支帯を切開すると，EHL 腱の脛骨側筋組織の遠位端が癒着化し，癒着していた。癒着を剥離し母趾屈伸を確認，麻酔覚醒後母趾の自動屈伸を確認した。

【考察】

脛骨遠位骨端線損傷により上伸筋支帯内圧が上昇し，コンパートメント症候群を生じることが報告されている。本症例では，骨折による血腫，あるいは前脛骨動脈の損傷により上伸筋支帯でコンパートメント症候群が生じ，上伸筋支帯内の EHL 筋組織が虚血性壊死に陥り周囲と癒着したことが原因と考えられた。